



自らの世界観、そして物語を、自分の生きる世界とは無関係であるとおぼしきところからの一撃によって、思うようにはまっとうすることができずに、あるいは閉じることができないでいるところで、鬱積した感情が、硬く人をはねつける言葉を伴って爆発する。

そして、このような「いね」の（宗教的）世界観の傷から発せられた炎は、もちろん、彼女一人のこととして終わってはいない。

重乃さんのこともうちのこともいうてならんよといって整子は召された、ほかのことは何にもいわずに、うちと輪島先生が夫婦になれるように最後まで心にかけてながら整子は召された、といまにも叫びだしたいような気持ちで考えながら、りえはぼうぼうと音をたてて燃え上がる整子の棺の炎をみていた。

ぼうぼうと小さい土の窯の中で整子は燃え上り、葬式が始まる前に訪ねてきた輝秀のいった言葉を炎にした。伯父さんに誰がいうたのかしらんが手の家のことはしれたぞ、困ったことになった、だましたことはあやまつてしまえばまあそれでもいいが、うちのへんでは長崎の町からというだけで嫁には貰わんとだからねえ、と輝秀はいったのである。

（略）

やっぱり隠れは隠れのしきたりを守っていかんと、こういうことになるんじゃないかとでしようか、もう順子は嫁にいけないという噂まで流れよりますから、本人たちが可哀想です。もしまた手の家ができて、長崎から親がピカドンでやられた子供たちがぞろぞろ入ってくると、順子だけが嫁にいけん位ではすまんことになります。切丸部落は血がとまらん、という噂がでたらもうそれでエタと同じことになりますけん、誰も嫁にもいかれんし嫁にもとれん、という国定の声がどろどろの油になってそれにふりそそぐ。

ぼうぼうと小さい土の窯の中で…。

親友を送るのに、なぜ、怒りの炎をもつてしなければならぬのか。親友を蔑ろにする者たちの言葉などを薪にした炎によって、なぜその親友を送らなければならぬのか。このような限界は、確かに私の限界に似ているのだけれども、しかし、私達が死者を弔う方法とは、世界観・物語が破れかけているという一種の危機的な状況の中で、常にこのようなものでしかありえないのか。

こうした飛び火は、ひとり原爆の火によるものではないのであらうけれども。